

西南の役における軍陣歯科と麻酔に関する内容

およびコレラに関する記録*

谷津三雄・滝口 久**

要 旨

陸軍文庫、石黒忠憲著、大坂陸軍臨時病院報告摘要第一号、同第二号、明治11年6月刊の2冊を参考資料とし、西南の役における戦傷者に対し、とくに佐藤 進がランゲンベッキ氏法により行った顔面・顎・口腔外科領域の観血的手術およびクロロホルムによる全身麻酔法の記録から、日本における顎・口腔外科、形成外科およびクロロホルム麻酔法を史実により明らかにした。

また、日本大学の学祖山田顕義はこの西南の役に司法大輔のまま旅団長（少将）とし、陣頭指揮をとり、コレラの惨事をつぶさに経験した。おそらく、これが心底にあり、コレラの予防対策を目的とし第2代大日本私立衛生会会頭に就任したのではないかと考証した。

（キーワード）

石黒忠憲、佐藤 進、ランゲンベッキ、石炭酸水、コレラ

西南の役は、明治10年（1877）2月15日西郷隆盛の挙兵によって戦端が切られた。征韓論に敗れて故郷鹿児島に下野していた西郷は、私学校党を中心とする「立つべし」との圧倒的な声に抗しきれず、「政府に尋問の筋あり」と称し、北上を開

始した。薩摩の士族を主力とする兵力は1万5千をこえ、2月22日熊本城を包囲、3月4日には田原坂で政府軍と激突し、ここで両軍の主力が文字通り死闘を繰り広げた。20日ようやく征討軍は田原坂の險を突破し21日に山鹿を占領したが、この16日間にわたる田原坂戦で消費された政府軍の小銃弾の量は、1日平均32万2,150発、総計515万5,000発であったと記録されている。死傷者は彼我ともに激増し、政府軍傷病者の統計中、戦死と負傷者とは1.0対2.5の比率でいかに激戦であったかを知る。これらの負傷者は久留米、福岡、長崎などの大包帯所（隊救護所）、軍団支病院（野戦病院）、軍団病院（後送病院）では収容しきれず、政府は大阪に陸軍臨時病院を設立し、負傷者の治療にあたった。この西南の役はわが国最後の内戦であり、かつ西郷隆盛の率いる薩摩の精鋭士族軍に対し、徴兵令によって組織された平民軍が相対峙した最初にして最後の近代戦である。そこで、著者らのひとりである谷津が架蔵する大坂陸軍臨時病院報告摘要第一号、13.0×18.5 cm 大、41丁の和綴本と同二号、13.0×18.5 cm 大、41丁の和綴本、陸軍文庫、大阪陸軍臨時病院長、陸軍一等軍医正石黒忠憲著、明治11年6月刊の2冊¹⁾を参考資料とし、特に軍陣歯科の事項と麻酔に関する内容を中心に報告し、軍陣歯学史および麻酔学史上の一端としたい。

大坂陸軍臨時病院報告摘要 第一号

本書の表紙および裏表紙には大坂陸軍臨時病院とあるが、序例には大阪陸軍臨時病院とある。大

* Military Dentistry, Anesthesia and Records of Cholera in War of Seinan

** Mitsuo YATSU and Hisashi TAKIGUCHI, Nihon University School of Dentistry at Matsudo 日本大学松戸歯学部



図 1



図 2

坂か大阪かについては日本史辞典²⁾によると「古代は難波(浪速)，中世には小坂または大坂と書いたが，明治に至って坂を阪に改めた」とあり，明治10年代にはその過渡期のため大坂と大阪の両方が使用されたのであろう。

表紙を開くと第1図は「大阪臨時病院本部全図」

(注：陸軍の文字がない)，第2図は「三月三十一日臨幸之図」(図1)，第3図に「手術場略図」で三枚の木版画が掲載されている。これらの図には説明文はないが，宗田 一³⁾氏によると第1図は本部のほか士官病室や養生室がみられ，「陸続と後送される傷兵は多いときには1回に400名，少

ないときでも 200 名以上で、正式発足前に病舎が満員となる始末（3 月 31 日の在院数 1,500 余名）で、木造仮病舎の建設がはかられ、1,000 名収容病舎が工兵隊によって急遽建てられ、これを第二病舎（後に第二養生室と改称）と称した。これがわが国最初の木造仮病院（バラック病院）となった」と記されている。第 2 図は 3 月 31 日の明治天皇行幸時の記録図で、左端は石黒忠恵院長で、後日五姓田芳柳（1827～92）画の「明治天皇大阪陸軍臨時病院行幸、将兵慰問」の図と全く同じ風景画である。

第 3 図の「手術場略図」はスキンネル氏のマスクを使い、クロロホルムあるいはエーテルとクロロホルムの等分を混和せる液を使用しての開放点滴麻酔下の下肢切断術の図で麻酔学史上貴重な記録画である（図 2）。

五姓田芳柳が明治 14 年に開かれた第 2 回国内勸業博覧会に出品した「大阪陸軍臨時病院施術図」と類似しているが、五姓田の図には 7 人の医師が描かれているのに対し本図は 5 人の医師である。また、五姓田の図にはスキンネルのマスクが顔面より離れており、またスキンネルの細嘴嚙も描かれていないことから麻酔開始前のものであるうか。

序 例

一、客年予（注：石黒忠恵）米国ニ在テ陸海軍医局ヲ訪フヤ各局ノ長官款待頗ル篤ク、帰ニ臨テ数十巻ノ書ヲ贈ル。取テ之ヲ閲スルニ大ハ米国南北ノ役ヨリ小ハ征蕃ノ闘ニ至ル。各戦ノ報告書其半ニ居ル皆實際ニ臨テ書スルモノニシテ我軍陣医学ニ裨益アルモノ尠カラス。因テ以為ク我邦戊辰己巳ノ役（注：明治元年の鳥羽伏見の戦い）負傷スル者無慮数千而シテ一片紙ノ刊行以テ其事ヲ述ルモノナク僅ニ十年ヲ距ル今日ニ於テ已ニ全ク其事跡ヲ失ス。仮令当年予草莽ニ在テ其事ニ関与セサルモ本邦医学歴史ノ為ニ大ニ慚愧ス可キナリ…而シテ本年西南ノ役起リ大阪ニ臨時病院ヲ置ルルヤ予始終職ヲ此院ニ奉ス…後年若シ臨時病院ヲ設ルコトアラハ、此書蓋シ参考ニ供スル所アラン」から本書出版の意図を知りうるのみならず「本邦医

学歴史の為」の一文はけだし卓見である。

またこの序例に「其記事ノ題目左ノ如シ」と今日の目次に類するものが次の如く記されている。

- 其一、病院設置ノ主意
- 其二、病院月誌摘要
- 其三、創痍疾病ノ景況
- 其四、医療器械論
- 其五、薬剤論
- 其六、病院病舎
- 其七、医官分課
- 其八、帰郷療養ノ概旨
- 其九、傭医並ニ看病夫名募概旨
- 其十、医官、看病人、患者取締曹長並ニ傭医ノ姓名

其十一、虎烈刺流行紀事概略

其十二、病者ノ衣食

其十三、各課服務ノ概旨並帳簿製表ノ式

其十四、会計総表並会計官姓名

其十五、寄贈物

明治十年十二月於大坂

陸軍一等軍医正、石黒忠恵 識

そのうち、其十一以降は第二号に記されている。また、この目次には「其一、病院設置ノ主意」とあるが本文には「病院設置ノ主意、第一」のように「其一」を「第一」に、しかも記入されている部位に違いがある。

「病院設置ノ主意、第一」と「病院月誌摘要、第二」の内容

当初は下関や神戸も候補地にのぼったが、諸条件を考慮して大阪に決定したことが「病院設置ノ主意」に「下関ノ地タル市街広カラス家屋大ナルモノ乏ク新ニ病院ヲ建ルニモ亦タ平坦ノ良地ナシ。神戸ハ平坦ノ良地アリト雖トモ関市新近ニシテ百貨未タ充分ナラス。若シ数千ノ病者俄ニ集ラハ需用ノ品物ニ窮乏スル虞アリ。因テ土地ヲ大坂ニ決定ス」より知ることができる。

また「此役ニ臨テ一時臨時ニ設ケラルルモノニシテ征討陸軍事務所ニ隸シテ臨時病院ノ名称ヲ付セラル。而シテ其官員事務悉皆常務ニシテ戦役出征ノ部ニハ属セサルナリ」から大阪陸軍臨時病院

の名称となり、事務系勤務者を出征者に属さぬ官員が従事したことを知る。

「病院月誌」に「明治十年 四月一日 大阪ニ陸軍臨時病院ヲ置カル是ヨリ先已ニ鹿児島県士族暴挙ノ兆アルヲ以テ熊本鎮台ヨリ去年神風党暴挙ノ為ニ負傷シ当時山鹿温泉ニ療養スル所ノ曹長南部菴以下七十七名ヲ三月二日大阪鎮台病院ニ委託シ来リ之ヲ大坂鎮台副病院ニ入ラシム是レ此臨時病院ノ濫觴ナリ」から、大阪陸軍臨時病院が正式にこの名称で発足した4月1日以前に負傷者の治療を開始していたことを知る。

すなわち、「三月三十一日ニハ已ニ入院負傷者ノ現員一千五百余名ニ上レリ、然ルトモ病院ノ名称条規未タ立ス。故ニ本日ヲ以テ此名称ヲ立ラレタリ、而シテ一等軍医正石黒忠憲ハ院長ニ、二等軍医正堀内利国、同横井信之ハ副長ヲ命セラレ」そして、大阪鎮台病院医官や事務員は臨時病院と兼務していた。したがって、先に述べた第1図の「三月三十一日 臨幸之図」は「天皇陛下臨時病院ニ臨幸セラル。其概略ハ午前第九時陸軍少将四條陸謁先導シ奉リ」の記事から大阪陸軍臨時病院になる前日になる。

「既ニ四千余名ノ傷者アリ、其一半ハ軽症ニシテ之ヲ病院ニ入レサル者トナスモ尚二千ノ傷者アリ、二千ノ傷者ヲ入レシムルニハ此病院ヲ建設スルニ非スンハ他ニ其宜キヲ得ル方策アル可ラス」…「陸軍大尉谷村猪介憤勵工事ヲ督シ六日ニシテ工事竣リ病室落成ス。千人ヲ入ルヘシ、第二病室ト称シ後第二養生室ト称スルモノ是ナリ。本邦ニ於テ所謂バラック病院ヲ設ル蓋シ此挙ヲ以テ嚆矢トス」とあり6日間でバラック病院が完成されたことを知る。

また「軍医監佐藤進東京ヨリ来リ石黒軍医正院長ヲ辞ス。乃チ佐藤軍医監ハ院長ヲ石黒軍医正ハ更ニ副長ニ命セラレ、横井、堀内兩人副長故ノ如シ。佐藤進最モ外科ニ長シ」とあり、その来阪の日時については記されていないが、「病院月誌摘要」の記事の前後から明治10年4月の初めであると考証される。佐藤 進⁴⁾は戊辰の戦いに従軍後、明治2年(1869)海外渡航免状第1号を得て、ドイツへ私費留学(在独1年で官費留学となる)、

ベルリン大学の正規医学課程を修め明治7年(1874)8月10日学位論文を提出し、日本人として正規課程を経てドクトルの学位を得た最初となった。更にウィーンに移り、ビルロートに師事し外科学を修めた。明治8年4月に養父、尚中の病氣のために留学から呼び戻され、同年7月7日に帰国。尚中を援け順天堂医院の外科を担当。わが国外科医の第一人者となった。それが政府の要望するところとなり赴任したと思われる。また「陸軍省御用掛准奏任佐々木東洋、東京ヨリ来ル之ヲ本院ニ止ム。従来東洋内科ニ秀名アリ」から、内科は佐々木東洋が着任して担当したが、6月に佐々木は陸軍一等軍医正に任ぜられた。またこれら負傷者には脚気やコレラに罹患する者が多かったことが記されている。

創傷疾病の景況治驗、第三

「創傷ノ部分ヲ概別スレハ上肢ヲ傷ク者十分ノ五、下肢ヲ傷ク者十分ノ二半、軀幹ヲ傷ク者十分ノ一半、頭首ヲ傷ク者十分ノ一ニ居ル。又創瘍ヲ以テ概別スレハ銃創二千五百、刃傷百四十、打撲十、火傷五ノ比例ナリ」からその概況を知る

「破傷風ニハモルヒネ、アトロヒネ、コロラルヒドラート、キュラレ、沃陣剤、酒類、コロロホルム等ヲ内服、外用、注射、灌腸等ニ用ヒタリ…衆論終ニコロラルヒドラートヲ推シテ最第一トスルニ至ル」また「銃創ノ為ニ神経痛ヲ発スル者三十余人…モルヒネヲ皮下ニ注射スルモ僅ニ睡ニ就クノミ忽ニ覚醒シ一月之ヲ用フレハ慣テ寸効ヲ奏セサルナリ…麻醉剤中前後モルヒネノ上ニ出ルモノナケレトモ慣ルレバ寸効ヲ収メサルナリ」から皮下注射が実際に行われていたことを知る。またモルヒネについては今日の薬物依存症と思われる記事がみられる。この記録は麻醉学史上貴重な史実である。

「創孔小ニシテ膿汁ノ排泄便ナラサル者ニハ永松軍医正ノ創意ニ由テ細長ノ護膜管ヲ挿入シ管端ヲ垂下シテ寝台ノ下ニ垂シムレハ流水学ノ法則ニ拠テヨク膿汁ヲ流出ス」は今日のゴムドレーンであろう。

「回魂奮興薬ニハ龍腦、麝香、ブランデー酒、

炭酸安模尼亞等ノ内服安模尼亞瓦斯ノ嗅入、龍腦油、亜的兒（注：エーテル）ノ皮下注射等ヲ施シタリ…龍腦油ノ皮下注射ハ亜的兒ノ便易且速効アルニ及ハス…亜的兒ハ注射部ニ痛ヲ覺フノ弊アリ」の記録、特にエーテルの皮下注射には今昔の感が深い。

「外科手術ハ截断、截除、關節截離、同整復展伸、癒接、刺泄、成形等行ハサルモノ殆ト之ナシ就中特書ス可キハ髀臼關節截離術、穿顱術…顎骨截除、頸動脈、鎖骨下動脈、腸骨動脈等ノ結紮、造頰術、造唇術、口蓋破裂縫合術、神經截除、髀臼關節脱臼整復等ナリ。手足ノ截除截断、小動脈ノ結紮等ハ枚挙ニ遑アラス」はまさに佐藤 進ならではの手術であろう。なお、佐藤 進は日本人として最初のリスター防腐法の実際の導入者であるが、大阪陸軍臨時病院ではリスター防腐法は実施されなかったことが以下の記事から知りうる。

「創処ニハ多ノ石炭酸水ヲ用ヒタレトモ彼ノ英医リステル氏ノ消毒法ヲハ之ヲ行ハサルナリ。是レ其法ノ善良ナルヲ知ラサルニハ非レトモ石炭酸ハ本邦未タ之ヲ製出セス、之ヲ客用セズンバ、後日窮乏スルノ時ニ至テ如何トモスル事ナキヲ慮テナリ。果シテ八月中旬ニ至リ該品欠乏シ十月上旬ニハ一磅（注：ポンド）ノ価金十円余ニ騰リ世人尚其品ノ乏ニ苦ミタリ。而シテ本院ニ於テハ日来客用スル故ヲ以テ、日々用ヒテ尚余裕アリ。為ニ非常ノ浪費ヲ省ケル事夥シ」から当時石炭酸は国産品はなく輸入品であったことと、十月に入って石炭酸の価格が高騰したのは「虎列羅病ノ流行スルヤ九月十日崎陽（注：長崎）ヨリ航送シ来ル者ニ於テ初メテ之レヲ発見シ漸次蔓延。十月初旬ニ至リ最盛ニシテ」からコレヲ流行のためによることを知る。

手術の術式については「截断術ハエスマルク氏ノ駆血帯ヲ用ヒ多クハ輪狀截断ニシテ開放療法ヲ施シタリ。善良ノ経過ヲ得シ者多シ…截除術ハ各部トモ縦截法ヲ行ヒ弁截法ヲ行ハス。而シテ必ス護謨ノ導泄管ヲ挿置セリ善良ノ経過ヲ得ル者多シ」とゴムドレナージの行われたことを知る。また「四肢截除術ニハ先哲ギプス繃帶ヲ賞用シタレドモ今回実験ニ徴スルニ一モ良績ヲ奏セス単純ノ

副木ヲ勝レリトス」、また止血には「トリネケットヲ用ヒス、エスマルク氏ノ法ニ抛テ単ニ護謨管ニテ上部ヲ緊縛シテヨク止血ノ効ヲ収メタリ」から副木とエスマルク氏の駆血帯が使用されたことを知る。

また「成形術ハ造瞼造頰造唇皆全効ヲ収メタリ」は日本における口腔外科史ならびに形成外科史上貴重な史実である。

なお、これらの手術はランゲンベッキ氏法により行ったことが次の記事により知りうる。「本邦医学近年大ニ聞ケ外科諸術モ亦随テ進歩セリ、然レドモラーヘンベッキ氏ノ唱フル骨膜ヲ存シテ以テ新骨ノ発生ヲ希望スル截除術ハ之ヲ書上ニ見ルノミ未タ實際ニ徴スルコト少ク吾輩モ亦未タ確信スルニ至ラザリシ然ルニ幸ヒ本年軍医監佐藤進ノ来タルニ会ヒ多ク此術ヲ実施シ其説ノ確實ナルニ感ス抑該氏（注：佐藤 進）欧州ニ在ルヤ久クラーヘンベッキ氏ニ從学シ多ク此截除術ヲ親験シヨク其法ヲ得タリ今回此地ニ於テ截除術ヲ行ヒ多ク良効ヲ収メタルハ實ニ該氏ノ勲ト言フベシ」と、また佐藤 進はドイツから帰朝し最初の手術はランゲンベッキ氏の改良法による「口蓋欠縫綴術」で、口蓋裂閉鎖術に対して骨膜下剝離術で行ったことは「順天堂医事雑誌」⁴⁾に記載されている。

全身麻酔については迷朦法と呼称され、また、モルヒネ類を麻酔剤といていた。

「迷朦法ニハ最初純コロロホルムヲ用ヒタレドモ七月以後ハ亜的兒トコロロホルムト等分ニ混和セシモノヲ用ヒタリ純コロロホルムハ此亜的兒ヲ混合スルモノニ比スレハ患者嗅入ニ苦シミ、且醒後頭重ヲ患フ。最初忠慮カ下阪セシ頃ハ医官人少ニシテ患者多ク其際施術スルニ方テコロロホルムヲ用フル一法ヲ定メタリ其法必ススキネル氏英国式ノ細嘴壺ト嗅入器ヲ用ヒ毎壺コロロホルム二ツヲ入レ〔亜的兒ヲ混セシモノナレハ亜的兒一ツコロロホルム一ツ〕回魂薬エレキテル（注：エスマルク氏の誤りか）開嚥器舌鉗子ヲ準備シコロロホルムヲ主宰スル人ニハ予メ患者ノ心動ト脈搏トヲ検セシメ一壺ノコロロホルムヲ用ヒ尽ス毎度必ス其事ヲ術者ニ告ケシム通常第二壺ヲ用ヒ尽シテ全ク迷朦シ第四壺ヲ用ヒ尽シテ手術ヲ了ル者多シ創

帯セシメ」また「イルリカートルハエスマルク氏原品ニ石黒氏改良セシモノヲ良トス」，また「体温計摂氏自記ノモノヲ良トス」から，華氏ではなく摂氏の体温計が使用されたことを知る。また「三角巾諸般ノ応用ニ宜シ」から，この戦役に広く使用されたと思われる。

「乙種ニハ截断器械，截除器械，結紮器械，コロロホルム吸入器，小手術器械，止血器械等ナリ」で，ランゲンベック氏の諸器械の使用されたことが記録されている。

また「コロロホルム吸入器ハスキネル氏創製英式ノモノヲ良トス，開嚥器ハハイテル氏（注：ハイステルの誤りと思う），止血器械ハエスマルク氏ノ駆血帯ヲ良トス」から当時の麻酔および止血法を知ることができる。また「手術台ハ英国式ノモノヲ用ヒタリ」と記録されている。

また，末尾に「此回東京ヨリ十五等出仕関源太郎ヲ具セシハ該人ハ器械研磨ノ業ニ妙ヲ得レハナリ日々此人ヲシテ刀刃ヲ研磨セシメ大ニ益ヲ得タリ若シ後年如此時機ニ遭逢セハ必ス如此人ヲ具スヘキナリ，又東京ヨリ外科器械舗松本市左衛門ニ命シ出店セシメ諸器械ヲ造ラシメシニ速ニシテヨク急俄ノ用ヲ弁シタリ」は日本における医科器械学史上貴重な史実である。

なお「陸軍軍医学校五十年史」⁵⁾（陸軍軍医学校編，昭和11年11月刊）に「明治10年戦役治験録」「明治10年製日本切除器」（本切除器ハ明治10年陸軍軍医監佐藤進欧州ヨリ帰朝シ東京鰯屋ニ命シテ製作セシメタルモノニシテ，此器械ニヨリ大阪陸軍臨時病院ニオイテ西南戦役戦傷者ニ対シ本邦最初ノランゲンベック氏関節切除術ヲ実施セルモノナリ」と解説がされている。

薬剤第五

主任薬剤官大鈴弘毅調査による一覧表が，沃陣ほか 279 種類の薬剤が難しい漢字で記入されているが，「然レドモ品数夥多ナレハ調製ニ日時ヲ費ス故ニ可及的簡易ニシテ品数僅少ナルヲ要ス，此ニ多ク用フルモノニシテ必要ト称スルハ，莫爾比涅（注：モルヒネ），規尼涅（注：キニーネ）…阿片末，格魯刺兒保爾母（注：コロロホルム），亜

的兒（注：エーテル），ブランデー酒…氷，牛乳，鶏卵」等31種類が上げられている。

また「最初ハオレーフ油ヲ多ク用ヒシカ八月以後該品欠乏シ頗ル高価ニ上レリ，因テ落花生油ヲ以テ之ニ代用ス，其価オレーフ油ノ四分ノ一ナルノミナラス新絞ノモノハ却テ陳旧ノオレーフ油ニ勝レリ，外用並ニ灌腸剤ニモ皆之ヲ用ヒタリ」また「石炭酸水ハ五倍，二十倍，三十倍，五十倍，百倍ノ五種ヲ備ヘリ，而シテ該酸ヲ溶解スルニハ里私林又ハ亜兒箇兒ヲ用フ就中亜兒箇兒ハ里私林ヨリモ其価廉ニ且里私林比スレハ半量ニシテヨク溶解セシムル故ニ多ク亜兒箇兒ヲ用ヒタリ」また「葡萄酒一時其品欠乏シ高価ニ至リシ時常酒又ハ味醂ヲ以テ之ニ代シコトヲ議シタレドモ患者妄用ノ弊ヲ慮テ之ヲ用ヒス」は今日のアルコール依存症を思わせる。

病院病舎第六，医官分課並ニ事務ノ区別第七，婦郷療養第八，雇医並ニ看病夫名募概旨第九は第一号に記載されているが，歯科領域および麻酔に関するものはない。

第二号の虎烈刺（注：コレラ）紀事概略 第十一

「虎烈刺ノ流行スルヤ其猛烈ナルコト実ニ耳ヲ掩フニ違アラス，況ヤ三軍凱旋混雑先ヲ争フノ際ニ於テヲヤ，既発ノ患者ヲ救療スルハ勿論未発ノ健兵ヲ保護スル実ニ大難事タリ其景況ノ細ナルコトハ大阪，神戸，西京三所虎烈刺流行紀事ニ詳ナリ，且ツ該所諸書ハ之ヲ一筐ニ収メ本病院ノ官庫ニ蔵シタリ，此編唯概略ヲ記スノミ」からコレラ流行による大惨事を知る。

「明治十年六月虎烈刺病支那上海辺ニ流行スルノ説ヲ東京日々新聞ニ得タリ…果シテ八月上旬長崎大浦ノ貧民ニ伝染シ直ニ若干人ニ伝播ス，内国流行ノ方面蓋此地方ヲ以テ最初トス…大阪ニ於テハ八月二十七日長崎ヨリ航送シ来ル患者ノ内九月二日大阪臨時病院第二養生室第一舎ニ入り発病スル二人ノヲ大阪陸軍部内ニ於テ今回此病ヲ発スル原始トス…虎烈刺病屍ハ必ス火葬ニスルニ決ス…石黒一等軍医正神戸ニ赴キ…会議シ入港検疫規則ヲ議シ即日軍医副奥村郁太郎ニ看病人卒並ニ器械

薬品ヲ付シテ神戸ニ遣リ軍人軍属ノ檢疫事務ヲ施行セシム…此日已ニ横浜 東京 該症ヲ発スル者アリ、人心為メニ恟々タリ、爰ニ於テ朝議深ク之ヲ慮リ内務省ヲシテ予防心得書ヲ刊行シテ諸府県ニ布達シ我陸軍ニ於テハ予防剋治故ラニ嚴重ナリ」はコレラ流行史上貴重な記録である。

「凱歸ノ兵九月三十日神戸ニ着スル 船中該症ヲ伝染シ五十余名最モ危篤ナリ、該地出張檢疫医官奥村軍医副加藤軍医補等檢疫規則ニ拠リ上陸ヲ禁シ細ニ避病ノ方法ヲ処セントスレドモ乗勝ノ軍人豈能ク医官ノ教ヲ聞キ衛生ノ法ヲ遵守スル者少ナク却テ医官ヲ罵詈喧嘩先ヲ争テ上陸ス、為メニ猛毒立地ニ暴発シ船上埔頭ニ僵ルル者幾百人嘔吐呻吟ノ声汀上ニ満チ市人ハ病毒ヲ恐懼シ遁レテ敢テ近ツカス」から、神戸埠頭における惨状を知る。

「患者ハ悶煩苦楚ニ堪ヘス互ニ相擁シテ呻吟号泣シ其穿ツ所ノ衣服ハ戦地血ニ染ムノ余更ニ復タ吐瀉物ニ汚レ惨愴見ルニ忍ヒス、誰カ敢テ傍觀スル者アラシヤ、医員ハ躬親ラ薬瓶ヲ帯ヒ病室ニ入り酒露罐ニ石炭酸水ヲ盛り傍ヨリ灌漑シテ毒氣ヲ消除シ扶ケテ臥褥ニ就ケ懇ニ薬液ヲ服サシム」から苦しむ患者の様子と治療に石炭酸が使用されたことを知る。

「大阪陸軍事務所ニ於テ会議ヲ開キ大ニ号令ヲ発シ第一九州ヨリノ旋歸ヲ止メ行進ノ諸兵ヲ到所ニ駐マラシメ、第二検査ヲ厳ニシ衣服ヲ改メ、第三神戸ニ仮営ヲ設ケ檢疫中之レニ居ラシメ…虎烈刺予防ノ事ヲ号令ス…一層予防ヲ厳ニシ一週或ハ二週間景況ヲ諦視シ每人ニ検証ヲ付シ初メテノ進行ノ許可ヲ得以テ帰京セリ、予防如此何厳密ニ将校医官心ヲ用フルコト懇到ナルヲ以テ其蔓延甚シカラス十月十日以来病勢頓ニ減衰シ十一月ニ及ンテ陸軍部内ニ全ク迹ヲ絶ス」はまさに驚異的な防疫の成果であり、佐藤 進、佐々木東洋らの苦勞がしのばれる。

なお、日本大学学祖山田顕義は「日本大学九十年史 上巻」⁹⁾によると、この西南の役には司法大輔現職のまま別働第2旅団長（少将）として陣頭指揮をとり、その戦功により陸軍中將に任ぜられ

たが、以後軍務に補することなく、司法畑に転じた。したがって、旅団長時代にコレラの惨事をつぶさに経験された。このことが大日本私立衛生会の第2代会頭に就任し、コレラ防疫対策のなすべきことは上水・下水などの生活環境の整備にあるとし、それに重点をおいた心底になったものと思われる。

とくに学祖と長与専齋とは大日本私立衛生会の創立された明治16年2月18日当時学祖は内務卿でその会員になり、また官制の中央衛生会は内務卿が管理していたことと副会頭の長与はまた衛生局長で学祖と極めて近い関係にあったことから学祖のコレラ予防の対策や上・下水道の設備に強い関心を抱いていたことを知っていた長与が当時司法大臣（注：長与は山田中将といていた）であった学祖に対して第2代会頭に就任することを強く要望したものと考証されよう。

結 び

本資料は小川鼎三監修「医学古書目録」⁷⁾（日本医学文化保存会）によると、長岡市の田中健一氏蔵、また国立国会図書館⁸⁾にも特・39-867として所蔵されていることから稀覯本の一つといえる。とくに西南の役はわが国最後の内戦であり、しかも最初の近代戦であったことから、多くの負傷者がでて、それに対し、ビルロートに師事し、ランゲンベッキの術式で観血的大手術がクロロホルムの麻酔のもと佐藤 進により行われた史実はわが国における軍陣医学および麻酔学史上貴重な記録である。また、コレラに関する記録はわが国における防疫史上貴重な史実であり、かつこの西南の役に少将として陣頭指揮をとった日本大学学祖山田顕義がやがて、大日本私立衛生会の第2代会頭に就任し、コレラの予防の対策に上・下水道の設備に力を注いだ⁹⁾のはこの西南の役におけるコレラの惨事をつぶさに経験したことで深いつながりがあると考証されよう。

なお、本文中の旧字体を一部新字体に改め記載した。

文 献

- 1) 石黒忠憲：大坂陸軍臨時病院報告摘要，第一号，同第二号，陸軍文庫，明治11年6月刊。
- 2) 高柳光寿，竹内理三編：日本史辞典，715，東京，角川書店，昭和53年1月刊。
- 3) 宗田 一：日本医療文化史，399-416，京都，思文閣，1989年2月刊。
- 4) 谷津三雄：歯学史資料図鑑，目で見る歯学史，順天堂医院における口腔外科，277-282，東京，医歯薬出版，第2版，昭和55年5月刊。
- 5) 陸軍軍医学校編：陸軍軍医学校五十年史，6-10，昭和11年11月刊。
- 6) 日本大学編：日本大学九十年史，上巻，127-138，昭和57年9月刊。
- 7) 小川鼎三：医学古書目録，20，日本医学文化保存会，昭和51年9月刊。
- 8) 国立国会図書館所蔵，明治期刊行図書目録，第3巻，195，国立国会図書館，1973年1月刊。
- 9) 滝口 久：日本大学の学祖山田顕義先生と医学，日本歯科医史学会会誌，第15巻第1号，9-30，昭和63年10月。